

島津亜美(しまづあみ)
年齢／20歳
身長／161cm
体重／43kg
BWH／79・50・82

大学生。
ごく普通の、今時の
女子大生。

趣味は特に無し。

日課は、朝のジョギング。
理由は、健康と美容のため。

男には興味は無かったが、
大学に入って、普通に彼氏が
出来る。

将来の進路は、普通のOL。



「はっ…はっ…」

亜美の、日課である、早朝ランニング。
昨日は飲み過ぎたので、カロリー消費を
目論んでのものである。

まだ若い亜美は、早朝にランニングをしても、
普通に学校に行く元気があった。

適当に2kmほど走ると、
一人暮らしをしている
アパートへと帰る。

シャワーを浴び、汗を流すつもりだった。
女である亜美は、出掛ける前にシャワーを浴びるのが
常識だった。
身だしなみにも気を遣う、普通の女の子である。

シャワーを浴び、バスルームから出る。タオルで髪を拭きながら、鏡の前に立っていると。

「お早う、亜美」

昨夜、部屋に泊まった、社会人の彼氏が起きて来た。

「まだ寝てていいのに」

裸体を見られても、
憶ずる事無く、亜美。
冷静に返す。亜美。何
裸など、とつくだ。度
見られていたのだ。も
昨夜も、身体の隅々まで
徹底的に。

男は、気にせずに肌を
晒し続ける。亜美の身体に
見惚れる。ランニングが
日課の亜美の身体は、
細く引き締まっている。
女として、理想的な
スレンダー体型だった。



「綺麗だよ、亜美」

昨夜、飽きるほど抱いた、愛しい恋人の身体。
しかし、一晩眠った事で、性欲が復活していた。
男は、亜美の裸体に見惚れる。

「恥ずかしいわ…
ジロジロ見ないで」

亜美は、あまりグラマー
では無い自分の胸に、
多少引け目を感じていた。
もっと胸が大きければ、
恋人を喜ばせてあげられる
のに、と。

「そんなに綺麗なんだから、恥ずかしがる事は無いよ」

「……そう。有難う」

平静を装い、答える亜美。本当は、結構嬉しい。まだ若いせいか、素直に感情を表に出す事に、抵抗があるのだった。

「あなたも、早く準備しないと、遅れるわよ」

いつもしている、ポニーテールの髪型に纏める亜美。子供の頃からの、トレードマークだった。

「ムラムラして来た」

「だめ」

明確に拒否する亜美。昨夜も、明日に備えて速めに休まなければならないというのに、3回も射精されてしまった。気持ちは良かったが。

「あんまりエロい人、嫌い」

生真面目な亜美は、セックスは嫌いでは無いが、あんまり無節操なのも勘弁願いたかった。

結局、二人はそそくさと準備し、亜美は大学へ、男は会社へと向かうのだった。

帰るなり、入浴をする亜美。今朝はシャワーだけだったので、ゆっくりと入る。

以前は、入浴など一日一回だけだった。
(洗髪などは、出掛ける前は必ずしていたが)

彼氏が出来てからは、頻繁にお風呂に入る。まるで、しずちゃんのような自分でも思った。

『綺麗好きって言うよりはね...』

理由は、恋人の存在である。
まだラブラブな二人。男は、暇さえあれば、身体を求めて来る。求められるのは、女としては嬉しい。しかし、準備が大変なのも事実。まあ、女に生まれた以上、仕方が無いと、割り切る。

「.....」

正直、恋人の事は好きだし、セックスも好きである。折角なので、楽しめる方法を考える。男が訪ねて来るまで、まだ何時間かあるからだ。今日は、もっと甘えてみようか。などと考える亜美だった。

「ああ……ん、ああ……っ」

予想どおり、帰って来るなり、セックスを始める二人。強く求め合い、愛撫。情熱的なキスに、亜美も応える。服を脱がし合いながら、すぐに繋がる。甘い声を出す亜美。声は、いつも控えめだが、今回は結構、聞こえるような声だった。感じている。繋がりが合いながら、服を脱いでいく。ベッドに着く頃には、全裸になっていた。

「だ……めえ……、そんな……あ……っ」

ぬふ、ぬふ、と繋がっている場所が見える。
『俺達が繋がってるのが見えるよ、亜美』と
男が言うと、亜美は甘い声を出した。

『だめ……こんな……いやらしい……』

自分でも、いつもより乱れているのが分かる。
待っている間、男の事を考えていたら、ムラムラ
してしまい、オナニーをしてしまったのだ。その
せいで、淫乱になっている。

『自慰なんて……
絶対しないって
思ってたのに……！』

我慢出来なかった。
恋愛感情と性欲は、
正比例するのは、
恋をしている者なら
誰でも知っている
常識だった。

「ほら……入ってるよ？何が入ってるのか、言ってみな亜美」

「あ……ああん……、ち……ちんぽ……」

男に誘導され、行為の中で教え込まれた。淫らな言葉。認めたくは無いが、言うとう興奮し、よりセックスの気持ち良さが増した。これが、大人の恋の世界なのか、と亜美は思う。
この日は、いつも以上に盛り上がり、亜美はかつて無いほどに乱れた。いやらしい事も沢山言った気がする。後で恥ずかしくて、後悔すると分かっているけど、止められなかった。亜美は、普通の恋する女子大生なのだから。

「ちょ……嫌よ、そんなの……！」

フェラチオを頼まれ、拒絶する亜美。
知識はある。今どきの女の子なのだから。
故に、抵抗があった。嫌悪感ではなく、
羞恥心からだった。

『こんなに大きいの……！？近くで見るの
初めてだから…』

ドキドキする自分が居た。何せ、
オナニーの時は、フェラする
自分を想像して、興奮していたからだ。

「じゃあ、
最初は俺が
してやるよ」

「や……ちょっと、止め……そんな……恥ずかしい、あっ……あああん！」

クンニで攻められ、何度もイカされる亜美。そのうち、いやらしい気持ちになって来た亜美は、
男への燃え上がるような愛しさに屈服し、いつしか、夢中でフェラチオをするようになった。

いつものように、日課であるランニング中に、それは起こった。

「……………っ！？」

ビリッ！と身体が痺れたような感覚。急激に意識が遠のく。

道端に倒れ込む亜美を、屈強な大男が担ぎ、車に乗せる。白昼堂々と、それは行われた。

その日から、亜美は姿を消す。恋人である男が、家を訪ねても、亜美の姿は無かった。そして、いつまで待っても、帰宅する事は無かった。

搜索願いが出されるが、亜美は見つかる事は無かった。

数日後、亜美は死体で発見された。死亡したのは、つい最近であり、生きていた間、何をされていたのか、それを特定する事は容易だった。亜美の身体からは、大量の体液が検出されたからだ。それは主に、唾液と、精液だった。特に膣内からは、凄まじい量の精液が検出された。(レイプされていた事は、明白だった。)

「も……止め……許して……」

ぬぶっ！ぬぶっ！ぬぶっ！ぬぶっ！

屈強な男からの、レイプ。気丈な亜美も、既に絶望し、抵抗する意思は失われていた。

「そんな……もう……ああ……」

反応が弱くなると、薬を打たれ、快感の世界へと導かれる。もう完全に、シャ○中セックスに依存していた。

レイプは、三日三晩、休まずに行われた。男もシャ○中であり、覚醒状態が継続していた。

最後の方は、亜美自身も淫乱化し、自ら腰を振り、セックス、チンポと連呼し、淫らな顔をカメラに向けるようになった。

「はあ……、ああ……凄い……おちんぽ凄い——っ」

恋人でも無い、誘拐犯による強姦。それに快楽を感じる亜美。既に、投薬によって、洗脳されてしまっていた。かつての、ストイックで、潔癖な雰囲気は、微塵も感じられない。

「まったく、淫乱な女だな。そんなにイイか？チンポ。ほら、カメラに向かって言ってみな」

「あああん、ちんぽ、ちんぽいいっ！私、チンポセックス大好きですう…！」

ずっと回り続けている、ビデオカメラ。亜美への強姦、薬漬けされ、現在に至るまでの様子が、全て撮影されていた。

「これから、今のお前の姿、全世界に配信するからな。楽しみだろ？」

「そんな……私のチンポセックスでマンコズコズコされるエロい所、世界中の人が……ああんそんなあ……興奮するう……！」

そう言って、淫らに腰を振りまくる亜美。もう、シャ○中で頭がイカれていた。欲望を貪るだけの、セックスマシーンと化している。

「そろそろ飽きて来たぜ。次のプレイに移ろうか」

「はい……何でもしてください……」

亜美は、男のどんな非道なプレイにも、快楽を感じるようになっていた。次に何をされるのか。考えただけで、イキそうだった。

「うえげっ！……っ！」

首と手を、ロープで縛り上げられる。
SMプレイか？と興奮していた亜美だが。

「ほら、どうだ？首吊りプレイだぜ」

天井から伸びたロープが、亜美の首を締め上げる。機械によって、徐々に巻き上げられていくロープ。亜美の首を締め付け、全身を首で持ち上げていく。爪先で立つ亜美。既に、息も出来ない状況だった。

「ああ……可愛い亜美」

「……っ！やめ……！
ぐるじ……じぬう……！」

男は、苦悶に表情を歪める
亜美の顔を見て、興奮し、
勃起していた。

「そりゃ、これからお前の事
殺すんだから。当然だろ？」

男は、誘拐犯であり、強姦魔。そして、
殺人鬼だった。女を犯し、殺すのが趣味。
特に、殺人は最も興奮するプレイだった。

「——っ！！——っ……！！」

遂に、爪先が地面から離れる。ぱたぱたと
足を動かし、床を求める。全体重が、首に
掛かり、ロープを締める。いくら体重の軽い
亜美とは言え、大人の女だ。その重さは、
人一人を絞殺するだけの重量を持っていた。

「ああ……可愛い！可愛いぜ亜美！ほら！お前の死ぬトコ全世界に見せな！」

カメラが回り続ける前で、男は暴れ回る亜美の断末魔の姿を見て、ペニスをしごき
まくる。やがて、射精する男。大量の精液が、亜美の身体に掛かる。その頃には、
もう亜美の身体は、ぴくりとも動かなかった。亜美はもう、完全に絶命していた。

『く……首がっ！
締まって息が！
……ぎ、ぎもち
いい……っ！』

『いぎがっ…
でぎなくでっ
…ぎもちいい
——っ！』

『ごっ……
んなずがだ
があ……！
ぜがいじゅう
にい……！
やめで…
やめ……
……。
……。』

パンッ！パンッ！

廃墟の中に、亜美の尻を打つ音が響く。宙吊りになった亜美の身体を掴み、後ろから犯す男。勃起したペニスが、亜美の膣を、ぬるぬると出入りしていた。

「ったく、いい女だぜお前は……！ どんだけボッキさせる気だよ……！」

がくん、がくん、と身体を揺らす亜美。見開かれた目は、瞬きも止まり、虚空を見つめている。絶命の瞬間。亜美は、明らかに快楽に支配された表情を浮かべていた。

「自分が死ぬのに興奮するなんて、どんだけ変態なんだよ、お前は……！」

男は興奮し、さらに激しく腰を突き込んでいく。ぱん！ぱん！と鳴り響く尻。まだ死んだばかりの亜美の肌は、瑞々しさが残されており、女としての魅力があった。男は、更に勃起する。

「ほらほら、世界中の男に見せてやりな。死んでもセックスしてるトコ……！」

カメラに向けて、亜美に正面を向かせる。宙吊りの亜美の身体は、がくんがくんと人形のように動く。衝撃に、柔らかい乳房が、ぷるん！ぷるん！と僅かに揺れ動く。その様子が、実に淫らだった。

「ほらほら、イクぜ！ 亜美！ 死体に射精するぜ！ もう死んだ亜美のおまんこにチンポブチ込んだままビュッとザーメン注ぎ込むぜ！ 妊娠しな！ 俺の子供っ！」

もう妊娠しない亜美の身体に、大量の精液を流し込む男。それでも、男の勃起は収まらなかった。

その後も、徹底的にレイプされる亜美。硬直し、変色し、腐敗が始まると、亜美の身体は、その辺に適当に廃棄された。

後に、亜美のレイプ、殺害、死姦動画が、ネットに出回る。亜美は、ネットの世界で、リアルレイプ殺害AV女優として、人気を博した。

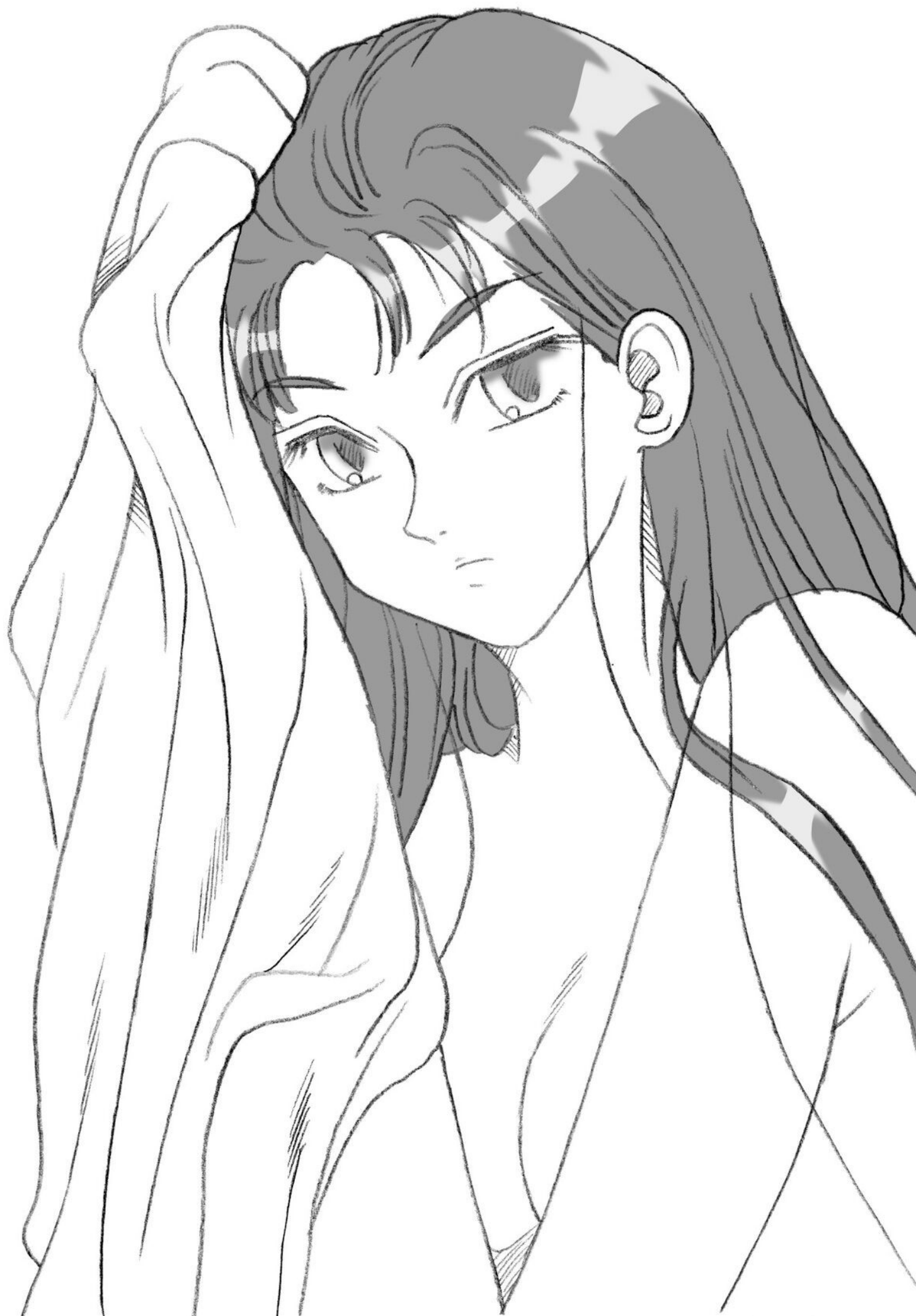
















Reminder that translations are not only welcome,
they are in demand!

提醒一下，不仅欢迎翻译，
他们很抢手！

翻訳を歓迎するだけでなく、
彼らは需要があります！

번역도 환영합니다
그들은 수요가 있습니다!